

## 恋文 (ラブレター)

薮崎 正寿 (ブラジル・路上)

そこには、例えば、ブラッコン (窪地) 気質ともいう生き方があった。どの区よりも都心に近く、ちかいと言うよりは、むしろそのビル群の懷に抱かれる地域を占めながら、火口のようにするどく抉られた地形と、その地形のために、つい最近まで市のごみ捨て場となっていたため、そこは、まだ当分、都市の凡ゆる利便から置去りにされて行くはずだった。電燈だけは流石に各戸にひかれてあったが、水道の蛇口は辻々の片隅に野晒しのまま露出し、窪地に住む二百戸の者は、例外なくバケツや金盥や大瓶や、とりどりの容器をたずさえて往復した。それで、不便というほどのことも感じなかった。窪地では、ひとは、洗顔や歯みがきの日常行事を、それほど不可欠とは考えなかったし、世話なほど、食器の数を汚すこともなかった。濯ぎ物にしても、野草の蔓延る空き地を持つ辻の方が手勝手もよく陽あたりもいいのだった。窪地気質には、徹底したリアリズムと、同時にひどく子供っぽいロマンティシズムとが併存するようだった。ミミズ長屋とよばれる四軒一棟の三軒目のアントニオは、自分の女に売淫させていたが、こ

の白人男と混血女のふたりくらい仲のうまく行っている同棲者の組はいない、というのが、ぼくの見たままの感想だった。それは、仲のよさ、と言った情緒的な感じともちがいが、互が、互を必要な物として見、捕え合っている、そんな結び付きの強さがあつた。貞操とか純潔とかにかかわる観念は、もともと二人に緑の遠いものらしく、生計の手段となり具となっているものを、二人は手際よく、使っても使い減りすることのない、使うほどに使い得の物として見、その得失だけを基調としている様子だった。次の、四軒目、共用の不浄と壁一重のために一段と家質の安いどんづまりには、ひろい屋の一家が住んだ。この黒人の夫婦は窪地一番の子澤山をすこしも苦しめないばかりか、自慢の一つ種にさえした。

― 又、これだね、そう間が無いのじゃないのかい。今度で、お前さんとこ全体幾人になるんだっつけ ―

水汲場で、手振りませた、そんな質問が放たれているとき、ぼくは、行き合せたことがある。

― ええと……ジオウンの上が四人で、下がやつぱり四人だから、九人になるわけかね ―

― なに言ってるんだい、それなら、お前、十人のはずじゃないか。だけでも、いつだったかばもつと多いようなこと言っていたの聞いた憶えがあるけどね、いったい、どっちが本当なんだい、厭になつてしまふね、自分の生んだ子の数もあやふやで、いい加減だなんて…… ―

そんなふうに、計算の達者な相手に揚げ足をとられると、黒人

の女房は臨月腹をゆすりあげて、ひとのいいわらいに顔中をくずすのだ。

―だつて、昼間はいつだつて、てんでんばらばらで一つ所に揃っているためしがないし、夜は室一杯重なり合つて寝るんだもの、勘定しようも無いじゃないか ―

そして、火酒好きの親父の方になると一層徹底し、こんなふうにも言うのだ。

―一生はよ、何と言つたつて、臨終の枕許に手前の血を分けた子の雁首を一つでも余計並べた者の勝だぜ。だつてよ、館みてえなお屋敷持ったにしてもよ、百万町歩の地所持ったにしてもよ、棺桶に納まろうという段になつては、からきし役立たずの冷てえよそよそしいだけの物だぜ。おまけに、それらときたひには、荒れたりちびたりすればつて、もつと、立派になることや、ひろがつて行くことなどは、望めない、と断言していいんだからな。そこへ行くてえと、餓鬼たちはちがう。奴らが俺と同じように奴らの餓鬼どもを拵えるのは太鼓判つきの見透しだし、その餓鬼どもが又、餓鬼を産み、そして又、という具合にどこまでもだな、おれのサンゲ（血）は芝草みてえなあんばいで、この地球中に広がつていく、え、いいじゃないか―

この思考法では、質はゼロのように無視されて、量だけが問題となるようだ。が、量が質に変化をおよぼすことは物理の初歩でもあるのだから、誤り、とばかり断定出来ないかも知れないのだ。そして、このミミズ長屋の二軒目（と言ってもそれは戸、窓、戸、

窓と交互に四箇所ずつ並ぶだけの、それ以上奥行も何も無い、各戸一室の間取にすぎなかった）は、ぼくだった。窪地気質には、ロマンティシズムもある、と言ったのは、だが、主に取りつきの、第一軒日の差配の母娘を心に置いてのことである。母親の方は久しい後家暮らしい四十歳前後のイタリア系の二世か三世で、娘のルジアはまだ少女期をぬけきっていない栗色髪だった。母娘のごとは、レエスかがりが主のようだったが、奥の黒人一家が市場からひろいあつめてくるクズ野菜の売り捌きに片棒かついで、かなり乱暴な上前の刎ね方もした。

つまり、この母娘にしても、決して窪地を場違いとする種族ではなかった。それどころか、そのことば遣い（彼女は怒鳴り合うような言い方でしか物を言わなかった）、その常に剥きだしの感情の伴う動作、（それは直截と言うべきもので、むしろ美德かも知れなかった）その、どの点からしても、もつとも窪地人らしい窪地人だった。その彼女らが、たった二、三十冊の本をもつというだけのことで、唯それだけの理由で、ぼくを特別の人間のように見なしたのだった。ここに引越してきた日、母娘は役目柄、ぼくの家財を点検するのが、多分目的だったのだろうが、変る替るきては顔を覗かせた。その意味では、小机と椅子とトランク二箇所と藁製クッションきりという、きちんとした寝台さえ持たない、ぼくの家財内容は、母娘を落胆させ先ぎきの室代の支払い能力にさえ危惧を抱かせたかも知れなかった。

が、壁の隅に据えた小机の上に本が積まれると、来合せていた

ルジアは、初めて飛行機でも見るこどもの目つきになり、無邪気な質問を放った

― 本（リーブロ）、本　だわね、あんたは、これみんな読んだの―

― はい―

― そのなかには、どんなことが書いてあるの―

ルジアが、一番上の、金いろの背文字が向いている。一冊を差して訊ねた。

― これは日本語で綴られた、小説の本である―

― ノベラ（小説）、ノベラだったらあたしもラジオでいろいろ聴いてるけど……、それはどんなもの、どんな筋のなの　―

母親も現れて、娘の側に腕を組合せた。母娘が期待する説明は、ラジオ放送のメロドラマ風の筋書にちがいがなかった。ところで、それはそれとして、ぼくのポルトガル語の能力ときたら、これまでの応答が限界一杯なのだ。ぼくは、文法上の配慮も発音への留意も忘れてしまった早目になった。

― これは、生きようとする人間が、その生きることのむつかしさを、いろいろに追究する物語である　―

ぼくの言うことが分ったのか分らなかったのか、ともかく、そんな答が彼女らを満足させなかったことだけは明らかだった。かぶりが横に振られ、何やら母娘同士ではじけるような遣り取りが行われるのを聞いた。僕もこれは後になって納得したのだが、ブラッコン（窪地）の人々に生きるむつかしさというものを理解さ

せるのは決して易しいことではなかったのだ。

ここには、落ちるところまで落ちたどん底の暮ししかなかったが、それなりに思い切った安易さがあり、しかもすべてが単純化された。少くとも、何事かをむつかしく扱い、考え詰めるという遣り方は、窪地の流儀ではなかったのだ。

― じゃ、この 本は……―

ルジアが、次いで小豆色の箱入の大型本を指で押えて言った。

― それは、フィロゾフィアである ―

前の分で懲りたぼくは、用心して、さりげなく答えた。

小説あたりまではラジオか何かで馴染があるか知れないが、哲学となればもう別の星ほど距離がひらくにちがいなかった。咄嗟の間にそんな判断が、ぼくの内で働いたのは事実だし、また、たしかに指示されている本は、前世紀末のある国の厭世哲学者の著書でもあった。ぼくは、彼女たちの追究に、止めを刺すために、扉ページに刷られた著者の肖像をひらいて見せた。眉間に鑿で刻みつけたような縦皺を重ねた、ふりみだした半白の髪の毛、その異風の写真は確かに彼女たちの好奇心を断つのに役立った。一人は、写真とぼくを見較べるように見た。感歎とも溜息ともつかない声と同時に洩らされるのを、くすぐったく聞いた。

この母娘ほどに、本といった物に無垢の畏敬を示した人間を、ぼくは知らない。それは多分、本とか読書とかと、あまりに無縁な環境の反作用のようなものなのだろうが、それにしてもこれは衝撃と言ってよかった。その夜、まったく久しぶりのことに、ぼ

くまで本への愛を蘇らせたほどだ。

その頃、ぼくは日中の大半を室にこもってすごした。室のなかで、何かをする、というのでもなかった。床にじかに置いた薫クツシオンに横たわってうつらうつらするか、あるだけの本の最初のページの最初の行だけに機械的に目をさらした。そんなふうにしなから、ぼくは、何者かに自分を賭けていたのだ。必敗の、裏目だけを信じる賭け方で、しかも賭ける元手が自分自身だということから、そこでは自分というものが欠けくだけ、次第に稀薄になって行くばかりだった。およそ、賭け師らしい生彩に欠けるこの賭博師は、乏しくなって行くばかりの自分に、唯、無気力な目をなげていた。そんなぼくの目が、郵便配達の足音がミミズ長屋の前で止まるときだけ、幾分光をよびもどした。窪地のような区域に郵便の集配人が廻ってくるというのは、些か唐突なもの出現のようだが、ともかく日曜、祭日などの休日のほか、毎日、午後二時と三時との間の頃、制帽に金属の徽章を附けた赤髭の男が姿を規したのだった。ありようは、後方の住宅地区への最短距離として、窪地の小路がえらばれていたに過ぎないのだろうが、それにしても、配達物があればこの集配人の分担となるわけらしかった。ぼくに届けられる度数は、三、四日置きか、少くとも二週間に三通ほどの割りの、封書だが、この界限の者にとって、それは稀有の事件であったかも知れないのだ。

取っつきの壁に朕めこまれた、電気計器の箱蓋が鉛筆の尻で打

ち鳴らされ、姓ではなく名の方が呼び立てられると、ぼくは、受取の紙片に署名をするため、デコボコの路地を木靴で駆ける。引替えに手渡される封筒郵便は決まって一連に缺が入れられ、跡が留金でとじられて検閲局の印が捺されてある。戦争は終わっていたが、当時の規制の幾つかは撤廃し残されていて、私信の検閲もその中の一つだった。

もちろん、受取人である、ぼくの名前が枢軸国側（それは既に壊滅して実体の無いものだった）の紛うことない日本人名で、発信名義も同じようにそれを示している、という理由に基づく。言うまでもなく、用いられる文字とことばとは、この国のもののみ依ることが強制される。ぼくは、その朱色の四角な検印を見る度に、羞恥を覚えずにいらなかった。当事者以外の目に晒すには、まったく不適當な内容のものだったせいもあるが、何よりもそれが、極端に語彙に乏しい誤りだらけの文字遣いにちがいない、という負目からだった。往復する手紙は、どれも一千以下のことばしかこなし得ない者の手になるぶざまさを示していて、否定しようがなかった。そこでは、もどかしさが行間をはみで、語感気ままにゆがめられ、ひろげられ、絶えず、幾オクタアブかずれた異様な語調の羅列となる。その甚しき加減で言えば、ぼくからのものの方が一段とぶざまだったにちがいない。一体、助動詞の殆ど見当たらない、孤立した動詞の、それも活用は直接法現在きりという文章が想像できるだろうか。おまけに、点在する名詞と、おもいだしたように置かれる形容詞とが、F E M E A（女



性)、MASCULINO(男性)の区別もでたらめなものだったとしたら……。そんなものは第一、ORACAO(文章)でないばかりか、VOCABULO(単語)の羅列とさえもよべないだろう。その大半が群書のページページからひきうつしの、基幹語だけの、無器用な不連続線にすぎない。ぶざまと言う以上に、アラレモナイものにちがいがなかった。手紙の届く日だけ、一日はやや充実し多忙になった。解読に辞書のページくりは再三だったし、返信をしたためるのに辞書をひく頻度は、更にしばしばだったからだ。

都心に出るのには、窪地を劃す正面の赤土の崖をよじのぼらなければならなかった。十五メートルほどの切り立ったような崖の両隅に、誰が何時刻んだともなく、階段形の足がかりが堀りつけられて通路の役目を果していた。そこをのぼりつめると、マルチネリイ・ビルの肩から上が間近く、ぬきんでる。そのビルのあたりが都心の目抜きとなる区画で、幾度か角を曲ると、ビルの裏手の通りに出る。路幅がせまって、両側に書店がっらなっている。そのなかの大きくも小さくもない一軒の店頭で足をとめる。店の一等奥のちよつと入りこんだあたりに何時も天井からぶらさがる裸電球が点され、その真下に大型本がかなりの高さに積みあげられてある。数日来、ぼくは書き割りの一コマ一コマでもなぞるように、きまって、同じその書店に入り、同じその本のまえに立ち、その表紙カバアに見入る。キノコ型の濃密な雲と、一つの都

市の名がそこに定着されている。店員の方に背を向ける位置に立ち、ぼくはさりげなく厚手の表紙をひらく。すると……くろずんだ廃墟の跡がかぎりなくひろがるのだ。一面、瓦礫と灰と、そして焼け爛れてなされる漿液と白っぽい骨片と炭化した小児の亡骸と……。

また、別のページには、罹災者の無数の阿鼻の様相が展開する。それらの中を、ぼくはノロノロとよぎりながら、じつに唐突に、被災者の収容されている建物の壁のいろを白すぎるとおもおう。指が指だけでうごいて行くようにうごき、次第に早められ、ページが繰られる。これらの光景をファインダアの枠に入れ、シアタアを切りつづけてやまなかつた手が、いまわしいものに思われてき、不意に烈しい嫌悪をよびさます。ぼくは元通りの位置に本を戻すと表に出る。

外は未だ明るかった。昼食と夕食とを兼ねる、日に一回の食事を、ぼくは、自動販売機を備えた広い簡易食堂でとることにしていた。食堂はマルチネリイ・ビルの側面を起点として伸びる大通りの二つ目の街角にあり、その少し先が市の中央郵便局だから、返信を出す場合にも便利だった。

その日、ぼくは書店を出て、食堂に入ると食券売り場で一金三ミルレエスの油飯、五ミルレエスの焼肉、そして少し思案した揚句、二ミルレエスのサラダ券を合せて需めた。

幾枚かの紙幣と硬貨とが釣銭としてよこされ、500ミルレエ

ス紙幣は金銭登録機の中に消えて行った。その青さつ（500ミルレエス紙幣）は、ぼくの最後の全財産だったから、いまは釣銭だけが全財産なのだつた。蓄えが沙漠に行く旅人の飲料水のように、それもかなり近い将来、涸れつきるのは知れきっていた。しかし、疲労の極みにある旅人が、空の水筒だけ残される終局に就いて、もう、それほど不安も恐れらしいものも感じないように、ぼくはそれに就いて殆ど考えることがなかった。ぼくは、ぼく自身に対して甚しく無気力でなげやりだった、と言っている。

受け口に滑りでる皿を、ぼくは慣れた手附ですくいとり、壁際に並ぶ食台に運んだ。これらの一連の動作を、ぼくは決して急がなかった。ナイフ、フォークの操作にも、咀嚼にも丹念すぎるくらい時間をかけた。それと言うのも日程表の中で、ぼくのその後の時間、窪地に帰り、翌日また窪地をあとに出かけるまでの……はまったくの空白で持てあましていたからだ。

ミミズ長屋を出たのが、常より幾分早かったせいで、マルチネリイの上層には未だ残光がとどまっていた。ぼくは、やがて、ビルの裾に添う街路を歩きだした。どこまでも続く石畳の目の中で、ぼくの心象風景は遠近をうしない、しばらくほしいままの去来にまかせた。

振分けに、前後一箇ずつの中型トランクをかついで砂深い部落道を歩いている。バスの往来する郡道から入って、既に随分と長い道程を歩きつづけているような気がするが、それは、砂の深さ

と、そこには不適當な短靴の歩きにくさと、トランクの重さとのせいらしい。その証拠に、バスを下りたとき道端に見上げたパイネエラの梢が、未だ隠れきっていない。

戦争が、ぼくをこの国で敵性国人にし、ぼくから職を奪い、そしてトランク二箇を振分けとする行商人にしたた。マスカッテは、その訪れを受ける農家のひとびとにとって、必要を満たす有用の商人ではなく、まず、好ましからぬ、歓迎しない来訪者、恵むかわりに何か一品買ってやって早々にお引き取りねがおう、というヤクザな者たちである。それは戦傷不具者のゴム紐売りのように、移民の落伍者が同胞の憐みを期待してしばしば行うなりわいである。つまり、そのときまだ商いの口明けもしない内から、ぼくには、そうした自分の位置に対する反省とうしろめたさとが支配的だった。ところが、やがて最初の割板屋根の農家の昼休みらしい集いの戸口を覗いたとき、中から、ぼくを迎えた十幾つかの目は、おどろいたことに、ぼく以上のうしろめたげな落ち着きのないかげにゆれていた。

（もし、わしや、わしの女房や子の手になる繭が、敵の、アメリカの役に立っているのだとしたら……）

彼らは、それを虫の羽音のような低い、震えをおびた声で言った。ぼくのひろげてみせる商品は、彼らの罪意識をあがなう祭壇への供え物か、免罪符になるとでもいうように気前よく買い上げられた。

（わしらの繭が、もし、アメリカの役に立っているのだとしたら

……) ぼくは幾度となく、彼らの告悔を開き、聞きながら桑の葉液に染るその手から代金を受取った。その内に次第に、ぼくは自分の商行為に耐えがたい苦痛を覚えるようになったのだ。受取る紙幣に、彼らの罪が染つていると言うのではない。罪は、ぼくにより、ぼくの行為をまっぴら完璧となるのではないか、という恐れからだった。またしても、ぼくは生計の道を失いに下降する。ぼくの、マスカツテの廃業は、もちろん、ぼくの下降線を描いたただけで、彼らに対して何ひとつ意味ももたず、ましてや、影響などあたえはしない。終戦の報と同時に生糸価格が暴落する日まで、養蚕は、在ブラジル日本人移民の手によって、專業化され拡大されつづける。

(もし、本常に、わしらの繭がアメリカの役に立っているのだとしたら……) この、彼らの告悔と行為とはあくまでも矛盾しあうが、だからこそ、ぼくは、そこに人間をみる。戦時中、陽のあたる産業と言えば、何らかの形で聯合國側に要望される品目であり、例えば、戦局と共に著しく市場性を狭められる非生産消費物としての珈琲の場合、元来絹と競い合う位置にある棉花栽培の場合、多くを期待することは許されなかった。養蚕の有利性に急傾斜して行った彼らの反応の仕方には最も人間らしいすべてが示されている、と言える。そして……ぼくだけが下降する。

そうだ、その部屋には幾人かの男たちがいた。来るはずの仲間が未だ揃わないために、珈琲をすすする音だけがときどき控えめに

立てられた。細心な、一定の間を置いたノックが伝えられた。入口に近い一人が椅子を離れて出て行き、やがて、表戸がひらかれ、又、しっかりと閉ざされるのを聴いた。すべてが音を盗む用心深さで行われる。その隠密さが、何か儀式めいた重さをただよわせる。そうだ、それは棺を囲む通夜の重さとよく似ている。ちがいは、そこに遺骸を納める棺が無いことと、居並ぶ顔に張りつめた、それゆえに生き生きと見える表情のあることだ。通夜の場合には、棺の中によこたわるひとが白く動かないように、客たちも白く表情を殺す。棺の中のひとの顔が、刻刻、人の顔でない冷たさと硬さに変わって行くにつれ、客たちも面のような顔を用意する。この部屋の男たちにはそれが無かった。研ぎすましたささと、同時にある抑制が張りつめた空気をみだし、それが内部をひきしめていた。それは、時と所との自然の所産とも言えるものだった。実際には、この会合が特別の意味を持った、というようなことはない。せいぜいのところ、これらの、もと日本語教師、もと邦字新聞記者、もと帝国総領事館囑託と言った者たちの、共通する不如意の近況交換にすぎず、それを越えたことはない。それにも拘らず、物ものしい緊迫感を孕むのは、やはり、戦時下という特殊な理由のためにちがいがなかった。

敵性国人の集合は、この国家から極度に禁忌され、婚礼や葬儀にさえ煩雑な手続きを事前に要した。別のノックが伝えられる。仲間の内の唯一人の二世青年で、その夜、最後の者として待たれていた。一同の顔から僅かながら緊張が解かれる。しかし、椅子

に着くか着かぬかに、低く内に寵った声で告げる言葉の内容が一座の者の頬を、前よりも一層固くする。

(……令状が、とうとうきました。おまけに、それは日本語で立ち話をしたとか、しなかったとかいう廉で、親父と一緒に街中から拘引され一晩留置されて帰された昨日の今日です。入隊は五日以内、二週間の内におそくとも編成を終り、出征、ということになるのでしよう。ヨオロッパのどのあたりかの戦線に配置されるんです。そして……)

微笑しそこねて、その顔がゆがんだ。調子の高い早口が変わって、語をついだ。

(そうなんです、そして僕らはそこで弾丸の撃ち合いをやるのだ。どっちかが、相手の弾丸に命中し、倒れるまで……。あんた方に、僕は聞きたいんだけど、僕らが、そんなふうにしたたかい、一人のドイツ兵をうちたおしたとする。それはニッポンに絶対無関係のことと言えますか。僕らの把る銃口がアレモンをさぐり、狙いを定める。そのこと自体、ニッポンにまったく関りのないことだ、と断言出きますか) 咄嗟の間に、答える者はなく沈黙が泥のように澱む。ようやく一人の年長者の声を聴く。齒の間から押出されるように殆ど唇の動きは窺われない。・渋りがちな物言いぶりだ。(君の、いまの……。その発言、その意識は尊いと思う。が、それはあまりに純粹すぎもする。あまりに……。だから、その思考は現実の中で躓くし、君は、苦悩しなければならなくなる。だが、くるしむのは、君のなかの日本人とブラジル人とが引き裂かれるか

らではなく、それだけのためではなく、じつは、倒す対象が人間だという、この理由によるのだ、と思う。人間同士が憎み合い殺し合わねばならないという、そこに……。だから……)

しかし、年長者はそこで立ちつくし、ついに言葉を見失う。多分、彼は方法を誤ったのだろう。が、どちらにしろ帰着は同じにちがいないかも知れなかった。その道は陥穽を無数にもち、しかも結局は断絶する。

(だから……)

青年の瞳に、苛立たしげな憤りと焦躁のいろが一層つよく加わり、居並ぶ一人一人を睨むように見据える。

(米国の日系二世は、イタリア方面の第一線で随分やっている、と言われるが……)

沈澱する重苦しさに、耐えかねた別の声がためらいつつ言いかけるが、それは、青年の追究の切り返しを、激しくするためだけに役立つ。

(だから?……だから!……)

音という音が消え、自身の靴音だけ、ひどく遠いもののように、だが、唯一の音として耳の中で鳴りつづけた。

……ああした仲間からも何時か離れていた。あの会合の内にある自慰に似た、気負いや詠嘆やその物言いぶりが、ぼくのなかで次第に空転するようになったからだった。ぼくは、ぼくを知るすべての人たちから別れ、隠れることを望んだ。それは、ときに生



きることさえ困難にするものだが、そこに徹底し、下降の底を見極めたい、という思いによりつよくひかれた。それだけが、ぼくに残された氷を抱くような、暗い情熱かも知れなかった。

……そして、ぼくは目をあげた。深い谷間のようなビル街の上に、小禿鷹が四角く区切られた夕暮の空を背景にして遊弋した。コンクリートとアスファルトと石畳ばかりのこの都心の空に、死屍を好んで貪るといふ小禿鷹を招いているものは何なのか、と、ぼくは奇異のおもいにうたれて少時眺めた。黒色の大きな翼を持つこの鳥の時は十軒四方の内にあるはずがないのに、殆ど、羽ばたきも見せず、悠揚と弧をえがきつづけていた。何時の間にか、ビルの窓窓から放たれる燈の数がふえ、輝きを増して行った。マルチネリイの屋上の頂きに立つ標識燈の光が宝石のように息づきはじめののもその頃からだ。陸橋を手すりに添って、ぼくはわたりはじめた。激しい疲労感が一度に襲った。中ほどで、手すりに寄りかかつて、ひとときそうしていたり。この半歳、窪地と都心とのほぼ中間と言えるこのあたりでぼくはよくこのように、佇み、そしてじつにさまざまな光景を見た：と思う。陸橋と交叉する目の下の舗装路を、二度三度、人波がどよめき埋めつくしたが、それは枢軸国側の一国一国が攻略される毎の奉祝行列だった。坂のうねりは果てしなくうごめき重なり、橋の下の闇の手前でふくれあがった。また、熱っぽく、身内を悪寒が走ってやまなかった日、ぼくは、この舗装路をよこぎって行く尼僧の集団を見詰めた。雪白の頭巾の廣く大きくひらいたつばがや水面に浮ぶ帆のように寛

かに流れた。また、ある夜更には、橋袂にたつアパートの高層からひとの翔ぶのを見た、と思う。

いや、あれはちがう、あれはヴェランダに懸けわたされる干紐から離れた布か何かの落下のかけにすぎなかった、ぼくはそう思い直そうとしたが、黒曜石のように映えるアスファルト目掛けて舞いつづけたものの容は、たしかにひと以外のものではなかった、と尚言い張る声は執拗に消えなかった。

：舗装路には、絶えず光が條になって流れた。眞紅の小さな輝きは、束の間の揺曳を残して次次に橋の下で消えた。それは一方通行になっている自動車の尾灯にまぎれもなかったが、その小ささ、そのあかさ、それがぼくをひきいれるように離さなかった。それは今、かぎりなく橋下に吞まれる。そこに黒ぐろと底知れぬ淵が開いて……。まったく、故の無いおそれにちがいがなかった。目の下の舗装路が道であるかぎり、それはもちろん橋の下を貫き、どこまでもつづくはずなのだ。つまり、ぼくには道の必然性さえ信じにくくなっていたのだ。ぼくにとって、橋の下の暗黒は、不吉を湛える淵以外のものではなかった。顔をそむけ、身を剥ぐように手すりから一、二歩離れた。電光ニュース盤の点滅が、隔てる闇を越えて、ぼくの目に飛びこんできた。

　　〓〇・MERCADO・DO・CAFFEE・O・PRECO・  
ELVADO〓（珈琲市況上昇）

終戦後、沈滞期を突きぬけて、上昇機運に乗りつづける珈琲市況の報道がしばらく流れた。ぼくの目はその意味を殆どとらえず、

文字の輪郭だけを見送った。ニューヨオク取引所での建値らしいポンド当たり何十セントといった数字のつらなり、それが終わると、どこかのメエカアの商標らしい形が現れる。又、文字が流れだす。商業広告に類するものらしい。

|| P R E Z A D O、○・S E N H O R……

P::R E::Z A::D O、何故、そのとき、その文字の綴りが矢になってぼくを刺し貫いたのか、説明することには困難を覚える。根底には、ブラジル語の不練達者だということの意識と、そのブラジル語につながる自分の行為が常住気になり、神経繊維を鋭くしていたためかも知れない。ともかく、それは巨きな閃光となつて、ぼくの内の一群の記憶を照らしだし、ぼくは、手の甲で瞼をこすって消滅する文字を追った。ぼくが、未だそのことの意味を十分悟っていなかった、と言つては真実でなくなるし、だからこそ、それは急速に恥のいたみに変わりはじめていた。街路燈のあたりを求めて進んだ。危く人と突きあたりそうになったが、それにも殆ど、関心は払わなかった。明りの届く下に立つと、ぼくはポケットに突っ込んであった封書を取出した。折り畳んだ便箋をひらくと、冒頭の綴りは紛れる方もなく P L E S A D O としたためられてあった。便箋は、言うまでもなく例の書信だし、プレザアドは手紙の書出しの、慣用句だからそのつもりで使用されているのにちがいがなかった。

が、それなら、ここは電光盤に現れたあの文字のように、P R E Z A D O とならなければならないのではないか、それでこそ、

親愛なるとか、おなつかしきとかの意の表示となるので、第一、PLESADO、などもいう綴りはどんな辞書にも無く、そんな単語自体無く、まるで意味の無いアルファベットの、集合に過ぎないのかも知れなかった。そして、ぼくの記憶によれば、ぼくたちの間の、PLESADOのやりとりは先ず相手方によって、始められたのだ。それを借用し、鸚鵡がえしに使い慣れてきたという覚えがいよいよ確かとなった。概して、ぼくより幾分ましな相手の語学力を、そのために疑うこともなく、それこそ、一字一字なぞるように一つの母音もゆるがせにしないで、模倣する傾向がぼくにはあった。それだけに、ぼくの冒した誤りは、じつに念が入っていることになるのだった。

― これは、どういうことになるのだ―

ぼくは覚えぬ独語した。相手が、男のぼくに、PLESADOと書きはじめるのは、綴り自体の間違いを別として言えば、未だすくいがあった。が、男のぼくが、相手に宛て、PLESADAとしないで、同じくPLESADOと書いたのでは…どうにも救済不能だ。SODOMITA（男色者）！ 苦笑以上に、おそらくはある種の衝撃をうけたにちがいない検閲官の顔が想像されて、ぼくは貧乏ゆすりをしはじめた。

― 手紙、というものが、いつも必ずその宛名人に対して書かれるとはかぎらないにしても…。殊に、恋文というものが、しばしば実在の宛名人を超え、独り合点のの性質を帯びがちだ、としても…。それにしても、これはヒドすぎるようだ ―

と、ぼくは独り言を言いつづけた。窪地で送り迎えた半歳を振り返って見ないではいられなかった。ぼくたちの恋文が、どうもその冒頭から過誤の空転ではじまっているように、何も彼もが、空まわりの終始だったのではないか、と思い沈まずにはいられなかった。その恋情はもとより、あのマルチネリイ・ビル裏の書店での考察も、影のように附いて離れないさまざまな心象風景も、すべて観念的な感傷に基づくのではないか、と思い惑わずにはいられなかった。ぼくたちが互に書いて倦むことのなかったものは、実は手紙でも何でもなかった。ぼくたちが交し合ったものは、決して恋文ではなかった、と、ぼくは考えた。

PREZADOとPLESADとは単に二箇の子音の書き損じではなく、綴りやことばの間違いにだけとどまるものでなく、最もよく、ぼくたちの関係を象徴しているのかも知れなかった。しかし、ぼくはこの結論に手もなく頭を下げてしまうのが、何としても口惜しかった。それで、現に手に握りしめている便箋の本来の発信人であり、かつ、ぼくの書く手紙の受取人でもある、相手の貌を宙にえがいて見ようと思った。……その砂ぶかい道、そのパイネエラの高い梢と花のいろ、その相手の住む家の側の小さな流れの瀬音、そこまでは難なく想いうかべることが出来た。が、それから先の肝腎なところにくると、それは心外と言うより仕方なかつたが、幾度試みても成功しなかつたのだ。ぼくの内で、何かが音をたててくずれた。ぼくは周章し、流れる歳月を堰きとめ、手繰り寄せようとして、焦った。ひとつの感懐が沁みるよう

にひろがり、ようやく実感となりはじめた。ぼくの唇から、それは溜息のように低く震えを帯びて洩れ出た。

― ほんとうに、戦争は、もうとうに終わっている、というのに……―

ぼくは、淵のように沈む窪地を目の下に見ていた。窪地の、湿った黒さに目を馴らすために、しばらく佇んで呼吸を重ねていた。やがて、爪先探りに下り口の最初の一段を踏み、両腕をひらいて体のバランスをとりながら一足一足下りて行った。両足を、やつと底につけたとたん、ぼくは、自分の名を呼びかけられた。声は終りの方がかするかほど押しころされ、そのために直ぐには位置が測定出来ず、ぼくを戸惑わせた。二度目に呼ばれて、それが足許と言ってもいい身近から発せられていることは判ったが、そこには依然として闇ばかりがあった。

― おどかす奴だな、どこにいるのだ、出てこいよ― ぼくには、既に声の主が拾い屋の黒人の少年だ、ということとは判っていた。

「出てこい、てことはないよ、ここにいるんだぜ―

闇が起きあがって、二つの目と歯並とがしろく光った。

― おめえを待っていたんだ、九時前からずっとだぜ、くたびれちゃった―

文句を言うような、不満げな言い方をした。

― また、締出し喰ったのか―

これまでも、ぼくは、そんなことでこのジオウンを泊めて

やった夜があった。

―そんなんじゃない、おめえが大変なんだぜ、隣のアントニオの野郎がね、おめえの帰るのを、山刀なんか持ち出して待ち構えているんだ―

ジオウンが、ぼくの問いの見当外れを舌打する口調で言った。ふざけている風でもなく、あくまでも真剣らしいのだが、それが却って、ぼくを吹き出させてしまう。あまりに無稽すぎるためだ。―でたらめを言う奴だな、まったく……―

ぼくのあげる笑い声を、ジオウンが人差指を唇にあてて制止した。

―本当なんだ、てば。おれの言っていることを、嘘だとも思っているのか―

ぼくは、なお完全に笑いをしずめることが出来ないで、切れざれに言った。

―アントニオが、山刀を、ぬいて、ヒネリまわしている、としてもだな。それはエウなんかがお目当てはなく、どこからか鶏でも失敬してきて、料理をしようという、まずそのところへんなんだな。エウたちも、押しかけて行ってみようじゃないか。ぐずぐずしていると、それこそ鍋が空になってしまうぞ―

―そんな……、暢気なこと言っていて、おれ、知らないぜ。ほんとうに何も、おめえに覚えはないのか―

妙に、おとなぶつた言い方で、幾分、感情も害したらしい声音

だった。

―話が、途方も無さすぎるんだ―

ぼくは、言い訳するように答えた。うっかりまとも聞いて、自分の歳の半分にも満たないジオウンの笑いものになることも気がすすまなかった。何時、ペロリと舌を出すか分らない相手だった。

―憶えは、さっぱりなんだ。が、それはまあいい。だが、そのお前の言うことが真正銘だとして、それで……若しエウの下りるのが此方ではなくあっち端だったとしたら、折角のお前の苦心も何にもならなくなるところだったのじゃないか―

―あっちの下には、ルジアがちゃんと立っているよ―  
ジオウンが、ぼくの浅はかさをわらって言った。

―じゃ、お前が此処にいるのは……―

―ルジアに言われたからさ―

知れ切ったことではないか、と言わぬばかりだった。

！そうだったのか―

それなら、この待ち伏せ作戦は完璧と言える、と、ぼくは思った。多分、ジオウンの言う通り、ルジアの発意にちがいがなかったが、その智慧は、ぼくにほほえましかった。

唯、そのようなルジアの配慮から推して、事態が笑いのめしてばかりいられないのも確からしい。ぼくは改めて問を發した。

アントニオが、例のランプいじりから帰ったのは、すっかり暗くなつてからだつたという。いつもなら稼ぎにでる身支度を終



えている時分だのに女は未だ起きだしてもいなかった。(まだなのか。ぐずついていると夜が明けちゃうぜ)(知ったことじゃないね。自分ひとり苦勞するのがつくづく嫌になったんだ。当分、あたしは働きにでないよ)(たいした勢いじゃねえか。が、断っておくが、俺はすっからかんの文無しだぜ)(一文も?じゃ、昨日のお金は又みんな・・)

テレエザが、枕の跡のついた片頬を向けてはねおきるように起きた。それがきっかけで、取っ組み合いの騒ぎになったのだと言う。

―それで……―

―あとは、いつもの通りさ―

ジオウンは、何でも知り切っているというふうには鼻の附根に皺をつくって見せた。

―何しろ、アントニオの奴は窪地第一の美男のつもりでいるんだから、奴の取って置きの手、と言ったら、いっただってアレさ。戸だつてよく締めてもないというのに―

―もういい、わかった……―

ぼくは、こどもの口から、それ以上聞くのがつらくなって押しとどめた。

―しかし、それで、どうしてアントニオがエウを怒ることになるんだ―

―おめえのことを、おめえの名前を、ひいひい言いながら、テレエザが幾度も呼んだからさ―

ジョオンが大きな目玉をまつすぐ据えていった。それは、どうだ、恐れ入ったか……と極めつけているようで、それが、またしても、ぼくを笑いださせてしまう。

―分らないなあ、そんなときにエウの名前をよぶなんていうことが……―

―それは、けどミミズ長屋の隣近所の者みんなが、現に耳でもつて聴いたんだ。アントニオの奴は、長い麻縄をとうとう持ち出した。それで、ぐるぐる巻きに縛りあげた。

その間中、テレエザは、おめえの名を呼びとおしにした ―

― それこそ、たしかな間違いなのだな ―

水底にひきこまれるような、おもりの重さを感じながら、ぼくの声は沈んだ。窪地の住人が、概して情緒に乏しいということは、ぼくの動かない持論だった。充足や飽食への欲望はあるにしろ、それさえも即物的な、嗜好以前とよんでもいい、健康無類の食欲といったもののみがあるのだった。好意が主として、情緒の領域であるかぎり、窪地の住人にはあまり意味の無いものであり、テレエザが呼びつづけたという、ぼくの名にしても、それは唯そんな風に彼女の唇を衝いて出たというだけの、それ以上の意味のあるはずもなかった。美男のアントニオと、小麦色の柔軟な姿体を持つテレエザとは、それぞれ相手のうちに自分の必要とするものを認め合う一組で、それだけに、仲がいいと言う以上に、強い結合を持つはずだった。

― テレエザはことばを選びそこなった、つまり、それ

だけのことらしいな。今頃は仲直りも済んでいるにちがいない。ルジアにも言つて、ともかく帰ろうー

ぼくは黒い崖ぞいに、ルジアがいるという向う隅に向つて歩きだした。地に吸いつくような裸足の足音があとからついてきた。

ールジアもおめえのこと、確かに、好いているんだぜ。おめえは分厚い本をたくさん持っているだろ、それで、この窪地の女の半分ほどが、何となくおめえを好いているんだー

ーばかばかしいことを考えるじゃないか。ジオウン、本なんて大したものじゃないさ、殊にこの窪地の中では… A・M O E D A・D O U R O・P A R A・O・G A T O。つまり、猫に小判……。エウの故国なら、さしずめ、そんなふうに言うところだ、と言いかけて、半ばで、呑み下してしまった。ぼくは自信のない顔をふりむけて言い直した。

！お前にしたところで、エウの持っている本なんかには鼻もひっかけはしないだろ、どうだい、そうじゃないかー

ー そう思うかいー

ジオウンが、ぼくの脇を走りぬけ正面に向き直って叫んだ。両腕を一杯にひらき、じだんだでも踏むように足踏みをして言った。

ー そう、思っているのかいー

ぼくは、腰をかがめてジオウンへ顔を近づけた。見開かれていく目に：意外にも涙のようなものがあつた。見間違いだつたかも知れないが、少くともそのとき、ジオウンの双眸はいかにも大きく光っていた。そうして……ぼくは、闇の中にルジアらしい輪郭

が駈けてくるのを認めただ。

やがて、白い顔が眞直ぐに向いて、肩のあたりに長い髪がながれ、風にでも弄ばれるようにゆらめくのが、不思議な鮮明さで見とれた。ぼくは、ジオウンの両肩を抱くように諸手をあてがい、その頭越しに白い顔を見詰め、何が、自分たちをこうも喰いちがわせるのか、と考えつづけた。

ジオウンの、ぼくに対する憧憬にしても、それは三十冊の本の厚みが理由ではなく、ひよつとしたら、早朝から、他の者のように稼ぎにも行かず、いかにも自儘げの、無為と怠惰の生活の外観にひかれてのことかも知れなかった。そうだとしたら、だが、ジオウンのその憧憬は、あまり遠くない日、期待外ずれとなるにちがひなかった。ぼくの暮しがボロを出すのは時日の問題と言ってよく、その可能は初めから、かねに換えられるかぎりの持ち物をおねに替えた、その額のうちに限定されていたのだから……。

ぼくの裡で、あの電光盤の一綴りが蘇り点滅しつづけた。ようやく、人間の滑稽感が理解されてくるようだった。嗚咽とも忍びわらいともつかない、鳥のこえに似る擦過音が自分の唇から洩れているのに、ぼくは少時気づかなかつた。

(了)